

## 【小学校】

### ピアノとあの子

ねこふんじゃった、こぎつね、ドレミの歌・・・

玄関に置かれたピアノから、業間休みも、昼休みも、単音のたどたどしいピアノの音が流れてくる。いつも一人の子が弾いている。私や他の教員を見つけては、すぐにお話をする人懐っこい子。初めは、「ピアノが好きなのだな」くらいにしか思っていなかった。数日が経って、職員室でも度々名前があがる「気になる子」だということに気がついた。見かけたときは、お話をしたり、そこが玄関であればたまに一緒に弾いたりした。

教室では一人で過ごし、学習でも何かしら手をかける必要がある子だった。

共に過ごすうち、教員になったばかりの頃感じていた自分自身と重ねるようになった。分からないことが多いこと。できないことも多いこと。そんなあの子が、あの時の自分と重なった。しかし、自分は、子どものときも、教壇に立ってからも、たくさんの恩師に出会い、光をさしてもらってきた。今、私がこうして教員をしているのは、その方々のおかげである。私も、その子にとっての光でありたいと思った。

「あなたにとって一番の味方だよ」ということを知ってほしいと思い、休み時間はその子といっしょに折り紙をした。

次に、係活動を通して友達をつくらせ、居場所をつくってあげようと思った。係活動が始まると、その子は休み時間を使い学級のためにせっせと働いた。そして、みんなから少しずつ感謝されるようになった。しかし、度々職員室のドアの前に立ち、ドアの窓から黙ってこちらを見ている日もあった。その子の元へ行ってみると、「休み時間に何をしたらいいのか分からない」と言っていた。

彼女には遊び仲間が必要だと思い、一日二回ある休み時間のうち一回は、外遊びになかなか行かないその子を誘って必ず遊ぶようにした。「やったー、来てくれた」と、他の子も喜んでくれたことが何よりありがたかった。それから、徐々に何人かの友達と遊べるようになり、しばらくして学級全員で行う活動にも参加するようになった。

一学期が終わるころにはピアノの音は聞こえなくなった。

もう私が休み時間に一緒に遊ばなくても、学級全員が外で遊ぶようになっていた。そして、その子は、原稿用紙に半分も書けなかった作文が1ページ以上書けるようになり、「分かりません」を繰り返していた発言が少なくなった。「○○さん、すごいね」と認められることが増えていった。前向きな心で学習に臨み、ぐんぐん力を伸ばしていることが嬉しかった。

夏の面談でお母さんと話をした。最初、できないことが多い自分の子どもの成長に関する心配事を、暗い表情で話し始めたお母さんだったが、面談後、玄関で見送りをするとき、「今日、忙しかったけど、学校に来て本当によかったです。思っていたより色々なことができる子なんだなと分かりました」と話してくれた。あのお母さんの笑顔が今でも忘れられない。

恩師からこんな言葉を教わったことがある。「あなたが『よい子』と思う子は、これまでどの先生からもよい子として扱われた子。あなたが『困った子』と思う子は、これまでも困った子として扱われた子。そして、何もしなければ、これからも『困った子』として根を深くしていく。だから、担任は、そんな『困った子』こそ、一番大事にし、寄り添っていく必要があるんだよ」

できなかつたからこそ、気持ちが分かる。できるようになったからこそ、どうすればできるようになるかが分かる。教師はこれまでの経験の全てを生かせる、すばらしい職業であると思う。子どもには可能性がある。若芽のようにぐんぐん伸び、慕ってくれるかわいい子どもたちの成長をこんなに間近で見られて、関わることができ、毎日幸せである。

吹雪の中、歯を食いしばって登校する子どもたち。この子どもたちのために、子どもたちを育ててくれた方々のために、秋田県でこれからもがんばっていきたいと思う。